

正宗白鳥

島崎藤村氏について



# 島崎藤村氏について



私は軽井沢へ着いて間もなく、近所の空別荘を見て歩いたが、それらの別荘のガラス窓には、古新聞が貼られてあった。風雨に曝さらされて黄ろくなっている古新聞の日付などを見ているうち私はふと、長野のある新聞の文章に心を惹かれた。それは近所の小諸の事を書いたものであったが、その中に、「小諸」というと、我々は藤村氏の筆で現わされたその土地を心に浮べる。我々は知らず識らず藤村氏の目を通して小諸を見せられるようになって

いて、有りのままの小諸という土地は、最早見られなくなっている」と書いてあった。

私は、そこに傑れた芸術家の偉力を感じた。土地の印象ばかりではない、ある芸術家の筆に動かされて、我々はその傀儡かいらいとなつて、人生世相を見ることが多い。藤村氏の如きは、そういう魅力を以つて読者に働きかける作家の一人であるらしい。あの勿体ぶつた重苦しい執拗な人生鑑賞に、私などは引き摺あきりられた経験を有っているが、先頃、山崎斌あきら氏の『藤村の歩める道』を読んで、現代の青年にも、藤村宗信徒の少なくないことを察した。

今度久し振りに『若菜集』『落梅集』などの含まれた『藤村詩集』を読み返した私は、新たに『千曲川のスケッチ』を読んで、作者がこの山国の自然と人事とを、濃淡さまざまな絵として描いているのを見た。この文集には、散文詩とっていいようなものが多かった。氏の小説の材料をいくつもそこに発見することも出来た。

引き続き、私は『春』と『家』と『新生』とを、三日がかりで読んだ。氏が詩から散文に移った時の最初の長篇で、明治文学史上劃時代かく的作品とされていた『破戒』は、着想にも文章にも以前の文学に見られない清新

なところがあつて、相当に面白い小説であるに關らず、まだ作者が自分の芸術についての方針の定まらない時分のものとするべきであつた。新時代の文学者としての藤村氏の事業は『春』からはじまるといつていいのである。態度があしここで極つた。しかし、『破戒』あるいは、その前に作られた『水彩画家』などの短篇の方がかえつて、『春』よりも芸術として傑れているばかりでなく、あの調子で創作の道へ進んで行つた方が、『春』によつて極められた道を取つたよりも、詩人藤村氏の天分を充分に發揮するに相応ふさわしかつたのではないかと、今の私は思つ



ている。……とにかく、『破戒』と『春』との間に、藤村氏の芸術観は一変化したらしいが、そこには『蒲団』などの短篇や幾つもの力の籠った論文によって、「自己解剖」「現実暴露」「無技巧」などを、文壇の問題として持ち出して、人々の視聴を集めた田山花袋氏の感化があったのではあるまいか。単に花袋氏の感化とはいえないにしても、時代の風潮が藤村氏をも動かしたのであるう。

あの夢のような詩を振り棄てて、有りのままの現実を見詰めようとした藤村氏の努力の苦しさを、私は氏の一

生において見つづけた。氏は、芸術においても人生においてもつねに「艱難かんなんの道」を辿つて来たように、ともすると詠歎しているが、それは、氏が飽きもせず書き続けた自伝小説を読むとよく察せられる。氏は事物を苟いやしくもしない人であるから、自国の伝統をも人一倍重んじている。芭蕉西行一茶などはいうまでもなく、「文学に現われた国民性」（『飯倉だより』参照）によつて知られる如く、前代の人々の所行に一々敬意を寄せて、そこに深い意義を見ようとしている。源氏物語をも推称している。外国の作家についてもそうであるし、私は氏の感想

を読んで、氏が内外の文学者から受けた重荷についても考えさせられた。書物を読んでも、読んだものが筒抜けに消えてしまうようでは詰まらないであろうが、藤村氏において見る如く、重っ苦しく心に停滞しては苦しんだらうと思う。

中沢臨川氏は、『家』の序文において、作者をツルゲネーフに比較している。「生活の状態から感情の発露までよく似ている。作風について見ても、両者ともリアリストでありながら、心底は詩人である。その作物は努めて平明に実人生の描写を狙い、九分までは真を以って読

者をうなずかせるが、残りの一部は感情で補っている。それが欠点でもあれば特徴でもある。一方からいえば徹底しないという譏そしりがある」といつている。これは、当を得た批評のようであるが、「真」と「感情」とを別にしたところに、異論を挟み得られるし、『家』以後の藤村氏は、ツルゲネーフとはよほど色彩を異にしているともいい得られる。浅間の山麓で教鞭を執っていた時分の氏は、『猟人日記』などによつて、自然を見る目を開かれたらしいことは察せられるし、『破戒』の着想が『罪と罰』に負うところのあることは、明らかに分つている

し、『春』の書き出しは、ツルゲネーフの『処女地』の開巻の描写からヒントを得ているように思われるが、『家』は、作品その者の価値批判は別として、まぜり気のない島崎藤村の作品である。氏は『破戒』や『水彩画家』から進んで行かれる道を通らないで、外界の瑣末な事実拘泥したような自伝体小説の道を通ったが、『家』を完成するに及んで、とにかく、眼界の広い山上の一端に達したのだ。

『春』も、明治二十年代の、多感多情の青年の一むれを描いたものとして、相当の価値を持っているし、こと

に、北村透谷の一面が現されているところに、私は興味を寄せて読んだのだが、しかし、あまりに淡々として水の如く、作中の人物をモデルの実名に引き直してでも考えなければ、読者に生きた印象を与えないほどに、人間が活躍を欠いている。叙事的平面的で、作者の持っている詩によってところどころ味付けられていなかっただけなら、退屈で読むに堪えられないだろうと思われる。若い夢を見ている青年を描いても、ツルゲネーフのものは、情味横溢おういつしている。詩趣が流れている。

この『春』は、朝日新聞に連載されたのだが、当時は、

こういう非通俗の作品があちらこちらの新聞に現れていたのでだから不思議だ。藤村氏のものは、たとえ一般向きでなくっても、作者の文壇的盛名によって読まれるであろうが、長塚節の『土』が、腰斬の憂き目に会わないで、最後まで新聞に出されたのだから不思議だ。

『家』の前半は読売新聞に連載された。当時文芸部を担当していた私が、主筆の命を奉じて、作者を新片町に訪問して寄稿を依頼したのであったが、幸いに作者に腹案があったらしく、容易に承諾してもらえた。私も読んだり読まなかったりで、無論読者受けはしなかった。そ

の前に連載した花袋氏の『生』ほどにも受けなかつたらしい。しかし、主筆の方からは一言の苦情も出なかつた。この長篇連載中、老社長が逝去して、当時駐露大使であった本野<sup>もとの</sup>一郎が後を嗣<sup>つ</sup>いだ。新社長は、仏蘭西文学に通じているとかで、得意になって歐洲文学を語っていたが、新代の日本の文学については全く盲目であつて、言文一致の懸賞文を募集しようじやないかななどと、時代錯誤の事を平気でいっていた。それで、『家』などの文章は、言文一致として甚だ面白くないものと思つたらしく、新聞を引き寄せて、「……三吉はこういって」と、一節を



私に読んで聞かせて、自己の言文一致観をいった。会話に挿む地の文に、「××はこう、いって」、「こう、××はいって」と、近来書くようになったのは、藤村氏が元祖なのである。

新聞には『家』の前半が出ただけで、後半は中央公論に『犠牲』と改題されて、二度に分って掲げられたのだが、それは、作者の方で一時休息するために新聞を断つたのか、新聞の方から作者を斥けたのか、当時文芸担任を免ぜられていた私は、その間の消息を審<sup>つまび</sup>らかにしなかつた。

私はそんなことを思い出しながら、今度改めて『家』を通読した。田山氏のは違って、藤村氏の作品は、概して取りつきにくい感じのするもので、『家』も、はじめの方は随分読みづらかったが、読み込んでいるうちに、次第に作中に惹き込まれた。おりおり退屈して、一日十行の速読をしたところもあったが、大体において作者の歩む道を、私も随ついて行かれた。いろいろの男女、それらの人々を環の如くつながせ因縁を保たせる有形無形の家というもの、暗々裡に変遷しつつある時代というものの背景。私は、作者とともにそれを見ながらページから

ページを進んだ。そして、読み終るとともにこれは、量  
においても質においても、明治以来の大作の一つである  
と、断定せざるを得なかった。……私はこの一巻を机上  
に置いて、読んだあとを回顧したが、いろいろな問題が  
おのず自から私の頭に浮んだ。私自身の過去半生を、この一  
巻に現されている人世に見つけようとしたりした。

『家』は、それまでにこの作者の書いた幾つもの短篇  
を、順序正しく一纏めにしたものといってもいい。作者  
の自伝として『春』に接続して、四十歳前後の壮年期に  
及んでいるのだが、内容は前作よりも甚だ複雑になった。

夫妻間の暗闘、生存の苦闘、幾人もの子供の死、親類関係の煩累など、主人公の上についた雑多な事件が、要点を逸しないように取り扱れているのだが、全篇から受ける気持は甚だ陰鬱である。はじめからしまいまで貧乏が付き纏っていて、金不足のために、『家』の人々が冴えた生活の送られないのが、一篇の色調を陰鬱にした原因の一つであるが、材料を取り扱う作者の態度や筆使いが、我々を陰鬱にする大なる原因になっていると、私は思う。独歩や花袋氏の作品には、暗澹たる材料が取り扱れていても、こんな重苦しいねばっこい感じが漂ってはいない。

独歩は筆が冴えている。サラサラとしている。底が見えないというような感じの作品はない。彼れは自伝小説は書いていないのだが、彼れの面目はその作品の上に見え透いている。自然主義勃興当時の幹部のうちでも藤村氏はよほど柄が違っている。

氏はかつて、ツルゲネーフの小説には、書かれてある者よりも書かれていないところに大切なものが潜んでいると、これを水面に一端だけを現した海底の巨巖にたとえたことがあった。ツルゲネーフにそんな趣があるか否か、私は疑っているが、藤村氏には確かにそういうところ

ろがある。筆を抑圧して説き尽さず、底にいろいろなものを潜めているのが、『家』の作風である。この作者は忍耐が強い。

この『家』を形づくっている人々と同じように、私なども旧家に育って、田舎の旧家に付き纏う因習には接触したのであるが、私は境遇と性癖とから、『家』にあるような煩わしさから免れることが出来た。

「あなたにしろ、私にしろ、われわれ兄弟の一生、……いろいろな人の知らない苦勞をして……その骨折が何に成ったかというに、大抵身内のもののために費されてしま

ったようなものです」と、三吉は兄に向って歎息している。それから、彼れはまた沈んだ眼附をして、「橋本の姉さんがああしているのと、あなたがこの宿にいるのと、私がまた、あの二階で考え込んでいるのと、それが、座敷牢の内にもがいていた小泉忠寛と、どう違いますかサ……われわれは何処どこへ行っても、みんな旧い家ふるを脊負って歩いてるんじゃないやありませんか」と、痛切な語を吐いている。

旧い家の桎梏しつこくを破って新しい世界へ出ようと努力は、随所にうかがい得られるが、伝統の支配を離れるこ

とは容易に出来ないのだ。それに、新婚とか芸術上の新事業とか、希望ある生活へと転換を試みても、そこには、直ぐに暗い影が付き纏って来るのだ。同じくらいな年輩の三吉と正太との自からなる対照が私には面白かった。志すところに雅俗の相違があり、無反省と自己反省との相違があり、陽性と陰性との相違はあるが、どちらも古い家の腐った沼から匍はい出して、何処かに清新な世を迎えようと努力しているのは同じことなのだ。ところが、どちらにも、希望や努力の愚かさを証拠立てているようにうまく行かないのだ。それで、作者の憂鬱な目は、陰性



な人物を取り扱う場合に見据えられているばかりでなく、陽性な人物の動静を見ている時にも、その人物のやがて包まるべき影を予想しているように沈んでいる。

……この憂鬱な沈んだ目を露骨に働かせて、アケスケと無斟酌むしんしゃくに筆を揮ふるったなら、意地悪く見られ、皮肉らしくもなるのだが、この作者は、底に憂鬱を湛えながら、個々の人物を柔しく取り扱っている。いかにも人のよさそうな一面を見せた親切があるので、藤村愛読者の多くは、そこに親しみを持っているのであろう。しかし『家』などをよく読んだら、それは決して人に希望を抱かせる

書物ではないのだ。

『春』の結末では、作者は、「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」と思って、深い深い溜息を吐いている。どうかして生きようとした、その後の十余年の生涯が、この『家』に現れたような生涯であった。作者は、三吉と対照されている正太が、仇あだなる望みを抱いていたまま死んで行くのを以って、創作便宜上の一段落としている。そして、三吉は正太に最後の別れを告げたあとで、激しく泣いている。それから彼れは、妻のお雪としめやかな話に耽ったあと、

「お雪、何時だろう。……そろそろ夜が明けやしないか。」

(こういいながら、雨戸を一枚ばかり開けて見た。……屋外はまだ暗かった。)

『家』の最後の句は、作者の心の象徴として用いられたのであろうが、これから、『新生』へ移って行くと、「まだ暗かった」のでなくって、「もつと暗くなった」ようにも思われる。

『生立ちの記』『桜の実の熟する頃』から『春』に『家』と、一人の作家の連続した自伝小説として、読後に回想

すると、艱難の道を辿った一人の作家の生涯を、有りのままに書き留めて行ったものであるに関らず、抑揚あり頓挫あり、伏線あり照応あり、金聖嘆に批評された水滸伝のように感ぜられるのは不思議だ。作家が意匠を凝らして作り上げなくっても、人生をよく見ていると、自から、そこに、文章の法則と同じようなものが存在している訳なのだが、人間流転の生涯を、あとから見て意味をつけて、ある意図の下にいろいろなことが起ったらしきするのは、藤村氏の持っている作風なのだ。同じく「有りのまま」を書いた作家とされていて、徳田秋声氏と

はよほど違っている。秋声氏のは批判がないといえはいるが、強いて勿体をつけぬところに、一層多くの自然らしさの感ぜられるところがある。

藤村氏の作風は、实例を挙げれば幾つもあるが、『春』の岸本が坊主頭になって帰って詫びるところが、『新生』の岸本が髯ひげを剃って仏蘭西から帰るところと照応している。青年期と壮年期との相違はあっても、同じ人間のすることだから、似ているのは当然であろうが、それに対する作者の意味のつけ方が重々し過ぎる。『家』のうちで、三吉がお俊の手に触れるところなどが、『新生』の

伏線として線の太いものなのだ。従つて『新生』の第十三回を読んで、突如として驚くのは、読者が迂闊うかつなので、作者は、その前作において筋の一端を水面に現していたのであつた。

作者は、『家』の作風を説明して、「これは文章で建築をする心掛けであつた。それには屋外で起つたことを一切又キにして、すべてを屋内の光景にのみ限ろうとした。寢床から書き、玄関から書き、夜から書きして見た。川の音の聞える部屋まで行つて、はじめてその川のことを書いて見た」といつているが、これによつても、藤村

氏が創作に際して、見聞し実験したものを、ただ有りのままに、はたから書き並べようとはしないで、芸術的趣向を凝らしたことが推察される。不用意のやりっ放しは藤村氏には見られない。

客観的態度を持して、底には憂鬱を湛えながら、上べは冷静を装って、文章で建築を試みた『家』から、『新生』へ転ずると、そこには、客観的態度だけでは済ましていられなくなっている。『春』や『家』を隔てて、『若菜集』『夏草』などの若い時代の作者の影が、人生のきびしい鍛錬は受けていながらもここによく現れている。

上べの「いわゆる自然主義」風の冷静は失われて、作者本来の面目である、純情的詠歎的の持ち味が、『春』や『家』時代の抑圧を受けないで、自在に出ているのである。『新生』上巻の前半、あるいは下巻の後の方は、作者の本領が最も高調に達したところである。作者は描いているのでなくって唄っているのだ。自己の苦悩を唄っているのだ。

藤村氏は、かつてゾラとフローベルと比較して、「ナナはどの章を開けて見ても、独りで高い声を出して笑いたくなるようなところがある。ボヴァリイ夫人の方は読



むに随って笑えなくなつて来る。私ははじめてあの小説を讀んだ時は、途中で恐ろしくなつて、書籍を伏せてしまつたことがあつた」といつているが、我々が『新生』を讀むに當つても、それに似た感じがする。しかし、『新生』は冷静なる人生鑑賞ではなくつて、主觀の発露である。苦惱に鍛えられた主觀が宗教的恍惚境に達するほどに高調されている。そういう点で明治以来の文学で他に全く類のないものである。私は、以前、この長篇が新聞に連載されていた時分には、止切れがちに讀んだのに過ぎなかつたが、今回これを通讀して、少なからぬ感動を

覚えるとともに、藤村氏の本領は峻厳なるリアリストたるに非ずして、ロマンチシズムの作家たるにあると感じた。あの傑作『家』に比べても、この方がどのくらい生彩を放っているか知れない。





日本文学電子図書館

---

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店  
2002年6月14日 第1刷

---

日本文学電子図書館